

初めての人のパーリ語

(宗)日本テラワード仏教協会 **Paṭipadā** (2002年5月号より新連載)【文責;小野道雄】

パーリ語 アイウエ?オ(1)

パーリ語の宿泊勉強会に参加したある大学生の話です。その大学生は二部の学生で昼間働いていたので、勉強会に参加するために休暇を取ろうと思い、上司に許可を願い出たところ、「なんだ、そのうちフランス旅行にでも行くつもりなのか」と言われたと言うのです。この笑い話のようなエピソードからも、パーリ語という言葉がいかにか一般の日本人には縁がないかということがお分かりいただけることと思います。

さて、パーリ語の勉強に際しての最大の障害の一つに、一般の社会人がパーリ語を教えてもらえるような場所がほとんど存在しないということがあります。印度哲学や仏教専攻のごく一部の大学生以外は、まず社会人向け講座でサンスクリット語の文法の基礎を教わり、その後はパーリ語の辞書片手に一人で勉強していくしかないのが現状です。

サンスクリット語を勉強するにはどうしてもあの文字(ナーガリー文字、日本でいわゆる梵字と呼ばれるもの)も同時に学ばなければなりません。その点パーリ語はサンスクリット語のように特定の文字というのがありませんから学習者にとっては大変助かります。私たち日本人が実際に接するパーリ語は100%ローマ字表記だと思って結構です。ですからことパーリ語の文字表記に関してはほとんど問題はありません。パーリ語の辞書についてはこの後すぐお話ししますが、実際私たちが使うことになる辞書もすべてアルファベット表記ですからご安心下さい。

いよいよこれからパーリ語自体のお話に入っていくわけですが、まず辞書について少しお話ししておきたいと思います。

前にも申し上げたとおり、日本ではほとんど認知されていないパーリ語のことですから、英語の辞書のように書店に行けばすぐパーリ語の辞書が手に入るというわけにはいきません。『パーリ語辞典』(水野弘元著)という辞書が『春秋社』(主に仏教関係の本を扱っている出版社で、あの『文藝春秋社』とは関係ありませんのでお間違いなく)から出ていて、これが現在日本で一般の方にも手に入るほとんど唯一のパーリ語-日本語の辞書です。(東京なら仏教書専門店の『山喜房』か『中山書房』であればすぐ手に入ると思います。)

パーリ語の辞書を最初に手にとってびっくりするのは、見出し語がいわゆるアルファベット順ではなく、私たち日本人が使っている国語辞典同様アイウエオ順になっているということです。これはもちろん、日本人が引くのに便利ようにもともとアルファベット順だったのをわざわざ水野先生がアイウエオ順に並べ換えてくれたわけではありません。実はサンスクリット語やパーリ語は、もともとアイウエオ順に配列することになっているのです。(日本語の配列はそれを真似た結果だと言われています。)いずれにしても、見出し語の配列が日本語と同じアイウエオ順だということは、私たち日本人にとってパーリ語がとても身近に感じられるだけでなく、日本語の国語辞典を引く感覚でパーリ語の辞書を引くことができるのですから、これは大変有り難いことです。ただし、アカサタナの配列など多少日本語の場合と異なる部分もありますので、それらの点についてはこれからお話ししていきたいと思います。

そのためにも、まず、パーリ語の発音のお話から入っていくことにしましょう、と言っても怖れる必要などほとんどありません。これも日本人にとっては有り難いことですが、パーリ語は基本的に日本語の発音でそのままローマ字読みをすればOKなのです。

以下、発音と綴りに関する注意点をいくつかあげておきます。[]内のカタカナは発音を表します。

1. a ā i ī u ū

a は[ア] ā は[アー]と発音します。ローマ字表記と同じで、文字の上の-はその音を伸ばして発音するという記号です。i ī, u ū も同様です。

例: ahāra [アーハーラ] 食べ物

jīvita [ジーヴィタ] 命

sūju [スージュ] 真直の

単語の訳はすべて『パーリ語辞典』に依りました。

その他の母音と子音(日本人にはちょっと難しいものもあります)は次回引き続き御説明することになります。

(この連載は場合によっては不定期になることもありますのでご了解下さい。)

パーリ語 アイウエ?オ(2)

2. e o

このeとoについては注意が必要です。前回説明したaとiとuは上に を付ければそれぞれ[アー][イー][ウー]と長い音になりました。それでは同じようにeとoも上に を付ければ[エー][オー]という発音になるかという、実は辞書をいくらよく見てもe、oという綴りは見当たりません。では、もともとパーリ語にはエ、オに関しては長く伸ばす音(長音)がないのかということとそんなことはありません。たとえば、eka(「ひとつ」という意味)は、[エカ]ではなく[エーカ]とeのところは長く伸ばして発音します。oについても同様です。Gotamīは[ゴタミー]ではなく[ゴータミー]です。

e、oについては便宜上に次のように整理して理解しておけばいいのではないかと思います。

もともと[エー][オー]と長く伸ばす音しかない。したがってわざわざ-の記号を付けて区別する必要がない。ただしe、oのすぐ後に子音や半母音が連続しているときは、a、i、uの場合もそうであるように短い[エ][オ]の音になる。例えば次のような単語ではeは短い[エ]になる。

avekkheyya [アヴェッケツヤ]

(avekkhati [アヴェッカティ](観察する)という動詞の、いわゆるジェランディヴ(未来受動分詞)と呼ばれる形で、「観察されるべき」というような意味になります)

とにかくe、oが目に入ったら[エ][オ]と発音しないで[エー][オー]と長く伸ばして発音する癖を身に付けることが大切です。

次は子音に関するいくつかの注意点についてお話しします。

3. kh gh ch jh th dh ph bh

パーリ語の辞書を見ると、このようにある子音字にhが付いているものがあります。これはいわゆる有気音といわれるもので、日本語のそれぞれカ行、ガ行、チャ行、ジャ行、タ行、ダ行、パ行、バ行を発音する時より意識的にもっと強く息を出せばいいのですが、もともと日本語にはこの有気音というのがありませんから、理屈では分かってても日本人にはやはりなかなか難しい発音の一つだと思います。薄い紙を口の前に垂らしておいて、この音を出した時紙がかなり揺れるぐらい息が強く出ていればOKだというのですが・・・、それほど気にする必要もないのではないのでしょうか。

例：ghāta [ガータ] 殺害

chanda [チャンダ] 欲

jhāna [ジャーナ] 禅

dhamma [ダンマ] 法

日本語には有気音がありませんから、当然ながら有気音を表すカタカナも存在しません。

ついでに、日本語と同じ普通のチャ行はどのように表記するかということ、hを除いてca、ci、cu、ce、co([チャ、チ、チュ、チェー、チョー])と綴りますのでご注意下さい。

ところで、早速ですが、ce、coを[チェ][チョ]ではなくちゃんと[チェー][チョー]と長く伸ばして発音できたでしょうか。慣れるまではどうしてもつい[エ][オ]と短く読んでしまうものです。

4. ñ

日本語のニャ行の音です。

例：ñāṇa [ニャーナ] 智恵

5. n m (ṇ ṃとも書く)

これは日本語の「パン」のように鼻から抜く音だと思って下さい。

例：sangha [サンガ] 僧伽

dhammam [ダンマン] dhamma のいわゆる 目的格

今回は、最後に半舌音(はんぜつおん)と呼ばれる子音の発音(上のñāṇaのṇがそうです)について触れたあと、パーリ語の配列(日本語のアカサタナの配列と異なる部分がありますので)についてもお話ししたいと思います。その後はサンディ「連声(れんじょう)」とも言います)というやはり発音に関するお話が続きます。

(文責：小野道雄)

パーリ語 アイウエ?オ(3)

6. ṭ ṭh ḍ ḍh ṇ

最後に取り上げる発音は、反舌音と呼ばれる一群の発音です。書くときには、下に「・」印を付けます。この発音も日本語にはありません。

反舌音という名前からもわかるように、舌を反り返らせ、舌先を上顎に強く押しつけて発音します。

ṭh ḍh は有気音ということで、さらに強く息を出さなければなりませんから大変です。

例：aṭṭha [アッタ]八

paṭipadā [パティパダー]道

当然、有気音と同じように反舌音を表すカタカナはありませんから気をつけてください。

以上で、パーリ語の個々の発音についての説明はおしまいにします。

パーリ語の発音は基本的にはローマ字読みで構わないのですが、なかには息を強く出す有気音や、舌を反り返らせる反舌音のように、日本語にない発音もありました。

パーリ語は私たちにとっては、話し言葉や書き言葉ではなく、基本的に読み言葉であると言っていいと思います。しかし、だから発音はどうでもいいというわけではありません。

語学の現況のスタートラインが発音であるということにかわりはありませんから、ぜひ発音の勉強をきちとなさってから次のステップへ進まれた方がいいと思います。

さて、今度は辞書を引くときにどうしても必要になってくるパーリ語の配列についてお話ししたいと思います。

最初にもお話ししましたように、基本的にはパーリ語は、日本語と同様、アカサタナの配列になっています。ただし実際に辞書を引いてみるとおわかりになるように異なる部分も少なからずあります。ア行から順に、具体的に見ていくことにしましょう。

ア行については、[ア][イ][ウ]の短母音の後にそれぞれ[アー][イー][ウー]と長母音が来ます。

この短母音 長母音の順番は、これ以降も変わりありませんから、頭に入れておいてください。

a ā i ī u ū e o

次は日本語同様、カ行、ガ行、ナ行ですが、それぞれすぐ後に有気音(息を強く出す)が来ることを頭に入れておいてください。有気音がある場合は、いつもこの順番になります。

ka kā ki kī ku kū ke ko

kha khā khi khī khu khū khe kho

ga gā gi gī gu gū ge go

gha ghā ghi ghī ghu ghū ghe gho

ṇa ṇā ṇi ṇī ṇu ṇū ṇe ṇo

次はサ行かと思うと、あにはからんや、ガ行の次はチャ・チャ・ニヤ行が来ます。何度も何度も辞書を引いて、ガ行の次はチャ・チャ・ニヤ行だということを、指先が覚えてしまうぐらいになってくださいね。

ca cā ci cī cu cū ce co

cha chā chi chī chu chū che cho

ja jā ji jī ju jū je jo

jha jhā jhi jhī jhu jhū jhe jho

ṇa ṇā ṇi ṇī ṇu ṇū ṇe ṇo

この後は、次回に続きます。

パーリ語 アイウエ?オ(4)

次はタ・ダ・ナ行ですが、まず反舌音のタ・ダ・ナ行が先に来て、その後に普通のタ・ダ・ナ行が来ます。さらにそれに有気音加わることになりますから、これもかなり慣れないと、ついこんがらがってしまいます。

ṭa	ṭā	ṭi	ṭī	ṭu	ṭū	ṭe	ṭo
ṭha	ṭhā	ṭhi	ṭhī	ṭhu	ṭhū	ṭhe	ṭho
ḍa	ḍā	ḍi	ḍī	ḍu	ḍū	ḍe	ḍo
ḍha	ḍhā	ḍhi	ḍhī	ḍhu	ḍhū	ḍhe	ḍho
ṇa	ṇā	ṇi	ṇī	ṇu	ṇū	ṇe	ṇo

ta	tā	ti	tī	tu	tū	te	to
tha	thā	thi	thī	thu	thū	the	tho
da	dā	di	dī	du	dū	de	do
dha	dhā	dhi	dhī	dhu	dhū	dhe	dho
na	nā	ni	nī	nu	nū	ne	no

日本語だとナ行の次はハ行なのですが、パーリ語ではパ・バ行が来ます。

pa	pā	pi	pī	pu	pū	pe	po
pha	phā	phi	phī	phu	phū	phe	pho
ba	bā	bi	bī	bu	bū	be	bo
bha	bhā	bhi	bhī	bhu	bhū	bhe	bho

この後は日本語と同じで、マ・ヤ・ラ行が続きます。ただし、ラ行に関しては、英語同様 r と l がありますから注意してください。順番で言えば l の前に反舌音の ḷ が来ます。

ma	mā	mi	mī	mu	mū	me	mo
ya	yā	yi	yī	yu	yū	ye	yo
ra	rā	ri	rī	ru	rū	re	ro
ḷa	ḷā	ḷi	ḷī	ḷu	ḷū	ḷe	ḷo
la	lā	li	lī	lu	lū	le	lo

パーリ語では、次はヴァ行になっていますが、これはワ行と同じだと考えて構いません。theravāda をテラワダと発音してもテラヴァダと発音しても、実はどちらでも構わないのです。w の文字はパーリ語では使いません。

va	vā	vi	vī	vu	vū	ve	vo
----	----	----	----	----	----	----	----

そして最後がサ行とハ行で、これでパーリ語の配列はお終いということになります。

sa	sā	si	sī	su	sū	se	so
ha	hā	hi	hī	hu	hū	he	ho

(補足)

鼻母音 m n を含む単語を辞書で探そうとしてもなかなか見つからず困ることがよくあります。たとえば damsa [ダンサ] (蚊) は daka (水) の直前にあるかと思うと、一方で anga [アンガ] (部分) は ankusa (鉤) のすぐ後に出てくるといった具合です。この配列の仕方を理解し慣れるのがまた、一苦労です。

目的の単語を辞書でさっと探し当てられるようになってはじめて、本格的なパーリ語学習がスタートすることになります。(パーリ語の電子辞書があればとりあえず辞書で単語を探し出すという面倒な作業は必要なくなるのですが)

(文責；小野道雄)

パーリ語 アイウエ?オ(5)

今回は、いわゆる「連声(れんじょう)」のお話しをします。sandhi とも呼ばれる連音とは、二つの音が結合することによって生じる音声上の変化のことです。

どんなものなのか、実際に幾つか具体例を見てみることにしましょう。

dhanam me atthi dhanam m'atthi
[ダナン メー アッティ] [ダナン マッティ]
(私には財産がある)

lokassa iti lokassā ti
[ローカッサ イティ] [ローカッサーティ]
(「世間の」と)

rūpa khandha rūpakkhandha
[ルーパ カンダ] [ルーパッカカンダ]
(色蘊)

上の例でわかるように、ある単語の最後の音と次の単語の最初の音が結合する場合があります、その際にその二つの音が片方の音だけになってしまったり、もとの二つの音と違う一つの音になったりと、いろいろな変化をするのが連声です

『パーリ語文法』(水野弘元著/山喜房佛書林)の連声のページを開いてみればわかりますが、連声にはさまざまなパターンがあり、いくつにも分類されています。パーリ語を読み慣れてくると、なんとなく「あ、この部分はサンディかな」と勘が働くようになってきます。とにかく連声に関しても、何度も何度も具体例に接して慣れるしか他に習得の近道はないようです。

さて、これからいよいよパーリ語の文法のお話に入ります。次のパーリ語の文を見てください。

So Mallikam āmantesi.
[ソー マッリカン アーマンテースイ]
(彼はマッリカーに言いました)

<辞書> sa [サ] 彼
 Mallikā [マッリカー] マッリカー
 āmanteti [アーマンテーティ] 話す

辞書に出てくる形と文中に出てくる形が違っているのにお気づきだと思います。動詞もそうですが、特に名詞の語尾が変化していることにご注意ください。これを格変化、あるいは曲用といいます。パーリ語はこのように、名詞の語尾が変化する言語のひとつなのです。

英語はこの格変化を失ってしまいましたが、今でも一部にその痕跡を残しています。中学校で教わったあの変化表を覚えていらっしゃるでしょうか。

主格	所有格	目的格
I	my	me
you	your	you
he	his	him
she	her	her
we	our	us
they	their	them

いわゆる人称代名詞の格変化表ですが、パーリ語は代名詞も含め、すべての名詞が格変化をします。

上の文中で、so は sa の主格で、英語の he や she に相当します。主語になっていますから、「彼は」という意味になります。Mallikam は Mallikā の目的格でここでは「マッリカーに」という意味で使われています。

次回からしばらくの間、この名詞の格変化のお話が続くこととなりますが、実はこれがなかなか大変なのです。

パーリ語 アイウエ?オ(6)

アブラティヴ、ノミナティヴなどという言葉が盛んに飛び交っていたら、間違いなくサンスクリット語かパーリ語の勉強会です。

パーリ語の名詞には、全部で8つの格変化(曲用ともいいます)があります。

- 主格 (nom. ノミナティヴ)
- 呼格 (voc. ヴォカティヴ)
- 目的格 (acc. アキュザティヴ)
- 具格 (instr. インストゥルメンタル)
- 奪格 (abl. アブラティヴ)
- 与格 (dat. デイティヴ)
- 属格 (gen. ジェニティヴ)
- 処格 (loc. ロカティヴ)

英語の略称も含め、できれば日本語英語両方の表記を覚えてください。ちなみに『パーリ語辞典』は英語の略称を用いています。それぞれの日本語の名称を見ていただければおおざっぱな用法についてはだいたいの見当がつくと思います。

主格(ノミナティヴ)は、主語や補語として用いるときの形です。英語も同じ用語を使っています。

例) paññā udapādi (慧が生じた)

主格

呼格(ヴォカティヴ)は、文字通り、相手に呼びかけるときに用いられる形です。

例) me bikkhave (私の比丘たちよ)

呼格

目的格(アキュザティヴ)も、英文法で使っている用語ですから、およそのイメージは湧くと思います。

例) phalam adāsi (果物を与えた)

目的格

具格(インストゥルメンタル)は、「具」が「道具」の「具」であることからわかるように、手段などを表すときに用いられます。英語でいえば前置詞の with や by を用いるような場合に、この形が使われま

す。
例) etena saccena (この真理によって)

具格

奪格(アブラティヴ)の「奪」は「奪う」という意味です。ふつう「~から奪う」といいますから、英語でいえば前置詞の from などを使う場合に、この形が用いられます。

例) musāvādā veramaṇi (妄語から離れること)

奪格

与格(デイティヴ)の「与」は「~に与える」の「与」ですから、「~に」というような意味を表したいときに用いられます。

例) tassa phalam datvā (彼に果物を与えて)

与格

属格(ジェニティヴ)は、英語の所有格に相当します。「~の」という意味を表したいときに用いられます。

例) paresam vilomāni (他の人たちの過ち)

属格

処格(ロカティヴ)の「処」は「所」と同じですから、「~で、~に」というように場所を表したいときに用いられます。

例) Migadāye viharati (鹿野園に住んでおられた)

処格

『パーリ語辞典』をお持ちの方は、ぜひ、最後の『曲用』のページをご覧ください。約 10 ページにわたって名詞の格変化表が載っています。

代名詞・形容詞の格変化表まで含めれば 10 ページ以上にもなります。

この膨大な量の変化表を見ただけで、「ええ！ この表を全部覚えるなんて不可能だよ！」と、学習意欲などどこかに吹き飛んでしまいそうです。しかし最初から構えてしまう必要もありません。何はさておき、名詞の格変化表を実際に見ていくことにしましょう。

- a 語基			m. 男性	例 buddha		
			sg.			pl.
nom.	- o	buddho			nom.	- ā buddhā
voc.	- a	Buddha			voc.	- ā buddhā
acc.	- aṃ	buddhaṃ			acc.	- e buddhe
instr.	- ena	buddhena			instr.	- ehi buddhehi
						- ebhi buddhebhi
abl.	- ā	buddhā			abl.	- ehi buddhehi
	- ato	buddhato				- ebhi buddhebhi
	- asmā	buddhasmā				
	- amhā	buddhamhā				
dat.	- āya	buddhāya			dat.	- ānaṃ buddhānaṃ
	- assa	buddhassa				
gen.	- assa	buddhassa			gen.	- ānaṃ buddhānaṃ
loc.	- e	buddhe			loc.	- esu buddhesu
	- asmim̐	buddhasmim̐				
	- amhi	buddhamhi				

一番上に書いた「- a 語基」というのは、もとの形の語尾が - a だということです。『パーリ語辞典』の見出し語はすべてこの語基の語尾になっていますので注意してください。その次に「m. 男性」とあるのは、この名詞がいわゆる男性名詞であることを示しています。フランス語やドイツ語同様、パーリ語の名詞にも性別があって、すべての名詞は男性名詞、中性名詞、女性名詞のいずれかに、必ず分類されます。「男性」の前の m. は英語の masculine (男性) の略称です。同様に中性名詞は n. (neuter)、女性名詞は f. (feminine) の略称を用います。

表の左側の英語の略称は、前回説明したように、それぞれの格の英語表記の略称です。そのすぐ隣の - に続く部分がそれぞれの格の語尾です。そして一番右が実際に格変化した名詞の形ということになります。さらに、sg.、pl.とあるのは、それぞれ singular (単数形)、plural (複数形) の略称です。

一体、パーリ語の名詞は何通りに変化するのでしょうか。格が 8 つ、それぞれに単数形、複数形がありますから、単純計算すれば 8 × 2 で合計 16 の形があることになります。同一の格に語尾の形がいくつかある場合がありますから、実際には 16 よりも多くなることもあります。逆に同一の語尾がいくつかの格を表すこともあり、その場合は実質的には 16 よりも少なくなることになります。

これ以上煩雑な説明は避けたいと思いますので、とにかく『パーリ語辞典』の変化表の部分を最後までご覧になってみて下さい。男性名詞、女性名詞、中性名詞、そしてそれぞれいわゆる語基の違いによって、多くの変化のタイプに分類されているのがよくお分かりになることと思います。

ここで具体的にパーリ語の簡単な文章を通して、これまでお話ししてきたその他のポイントについても再確認しながら、名詞の格変化の実際について見ていきたいと思います。なお文には原則的に動詞があるわけですが、動詞についてはまだ説明していませんので、とりあえず名詞にだけ注目していただくことにして、動詞は無視していただいて結構です。

パーリ語 アイウエ?オ(8)

次の文章は、いわゆるジャータカ(前生譚)の一つで、日本人にもなじみのある(あった、の方が正確でしょうか) Sasajātaka (sasa は『兎』の意味)、兎が施しとして我が身を火中に投じたあの有名なお話のなかからとったものです。

(前略) Bodhisatto sasayoniyaṃ nibbattivā araññe vasati. Tassa pana araññassa ekato pabbatapādo ekato nadī ekato paccanta_ gāmako.

今回は、先生と生徒のやりとりという形式で、実際のパーリ語の勉強会の雰囲気を出しながら解説していきたいと思います。Tは先生、AとBは生徒ということにします。

T: それでは最初の文を、A君からお願いしましょうか。

A: はい。ボーディサットー ササヨーニヤン ニッパツティトゥヴァー アランニエー ヴァサティ。
まず、ボーディサットーは「菩薩」という意味の男性名詞 bodhisatta [ボーディサッタ] のシンギュラー(単数) ノミナティヴ(主格)で、「菩薩は」という意味になります。

次のササヨーニヤンというのは「兎」という意味の sasa [ササ] と「子宮」という意味の女性名詞 yoni [ヨーニ] の合成語(コンパウンド) sasayoni [ササヨーニ] (兎の胎内)のシンギュラー(単数) ロカティヴ(処格)で、「兎の胎内に」という意味になります。

T: 今、A君が合成語という言葉を使いましたが、パーリ語を勉強していくうえで、この合成語、普通、「コンパウンド」といいますが、このコンパウンドというのが実はとても大切なのです。
コンパウンドについては後でまた、詳しく説明したいと思っています。
それでは続けてください。

A: はい。次のニッパツティトゥヴァーというのは、nibbattati [ニッパツタティ](生ずる)という動詞のジェランドですから、ここでは「兎の胎内に生じて」ぐらいの意味になると思います。

アランニエーは、「森」という意味の中性名詞 arañña [アランニャ]のシンギュラー、ロカティヴで「森に」という意味になります。

最後のヴァサティは「住む」という意味の動詞の三人称単数現在形ですが、ここでは過去を表していると考えた方がいいと思います。

結局、全体では「菩薩は、兎の胎内に生じて森に住んでいらっかった」となります。

T: ジェランドという言葉も出てきましたが、動詞に関する事なので、これも後で説明することにします。とりあえず「~して」などと訳しておいてください。

A君の説明で特に問題になるところはなかったと思います。この文はちゃんと主語と述語動詞がありますから、それほど難しくはないはずです。

最初の Bodhisatto が主語で、最後の vasati が述語動詞です。sasayoniyaṃ nibbattivā (兎の胎内に生じて)と araññe (森に)は、それぞれ副詞句と副詞ということになります。このように基本的な文の構造がわかれば、あとは前後関係などを考えながら意味を考えていけばいいのです。

それでは、同じ要領で今度はB君、次の文をお願いします。

B: うう~ん、どうもよくわからないのですが.....。とりあえず個々の単語についてわかる範囲のことだけ言ってみます。

T: それでいいですよ。B君がわからないところは、A君もぜひ手伝ってやってください。

A: はい。わかりました。

B: タッサ パナ アランニャッサ エーカトー パツパタパードー エーカトー ナディー エーカトー パツチャンタガーマコー。

パーリ語 アイウエ?オ(9)

先月に続いて、先生 T と生徒 A,B の会話形式で進めていきます。

B:タッサ パナ アランニャッサ エーカトー パッバタパードー エーカトー ナディー エーカトー
パッチャンタガーマコー。

ええと、最初のタッサというのはたぶん、「それ」という意味の tad のジェニティヴ(所有格)の tassa [タッサ]ではないかと思うのですが。

T:そのとおりです。この場合は次の arañña がジェニティヴ(所有格)ですから、それに合わせて tad もジェニティヴになっていると考えてください。

B:次のパナはちょっと飛ばして、アランニャッサは、今、先生がおっしゃったようにジェニティヴ(所有格)で、「森の」という意味になると考えて、両方合わせて「その森の」という意味になります。

T:そのとおりですね。

B:次のエーカトーというのは、辞書を引いたら、adv.と書いてありますから、アドヴァーブつまり副詞で、さらに eka [エーカ](一つ)の abl.つまりアヴラティブ(奪格)とも書いてありますが、なんだかよくわかりません。意味は「一方では」となっています。

T:この ekato [エーカトー]というのは、もとは eka [エーカ](一つ)のアヴラティブ(奪格)なのですが、アヴラティブが副詞になってしまう場合があるのです。実は、このような現象は、アヴラティブだけでなくアキュザティブ(目的格)などでも起こります。このことを知っているとしても役立ちますから、ぜひ覚えておいてください。

たとえば、nicca kālaṃū ニッチャカーランī などという副詞も、もともとはアキュザティブだったものが副詞になったものです。nicca [ニッチャ](常の)という意味の形容詞と kāla [カーラ](時)という意味の男性名詞の合成語 niccakāla (常の時)の単数、目的格ですから、本来は「常の時を」というような意味になるのですが、この場合は「常の時に」すなわち「常に、いつも」という意味の副詞になってしまっているのです。

B:先生の説明を聞いても今ひとつピンときませんが、とりあえず次に行ってみます。

pabbatapādo [パッバタパードー]ですが、pabbata [パッパタ]が「山」という意味の男性名詞で、その後の pādo [パードー]は「足、麓」という意味の男性名詞 pāda [パーダ]の単数、主格で、あ、これは、さっき先生がおっしゃったコンパウンド、合成語ですね。

T:そうです。これも合成語、コンパウンドですね。B君、なかなか調子いいじゃないですか。

「山の麓」という意味になりますね。それでは、とりあえずここまではどういう意味になりますか？

B:pana [パナ]は、「また」ぐらいにしておきます。そすると、「また、その森の一方では山の麓は」となるのですが、その後との意味のつながりを考えると、何を言っているのかわからなくなってきてしまうのですが。

T:「山の麓」が主語だというのはいいと思いますよ。それでは述語動詞はどれですか？

B:んん～。それがわからないんです。動詞がどこにもないような気がするのですが。

T:そう、動詞はないのです。

B:え？

T:A君はどう思いますか？

A:はい、サンスクリット語もそうですが、英語の be 動詞に相当する動詞はパーリ語ではよく省略されますから、この場合も「ある」という意味の動詞が省略されていると考えればいいと思います。そうすれば「また、その森の一方には山麓があり」、もうちょっとと自然な日本語にすれば「また、その森の一方には山麓が広がっており」といったところでしょうか。

B:なるほど、そうすると、その後も同じパターンだと考えればいいわけですね。

ekato nadī [エーカトー ナディー]

nadī (川)の主格で「川が」になりますから、「一方には川があり」となるわけですね。

「一方には川が流れており」、ですね。

パーリ語 アイウエ?オ(10)

(先月の続きです)

T:それでは最後の部分も、B君お願いします。

B:はい。これもさっきとまったく同じパターンですね。ekato[エーカトー]が「一方的には」という副詞。paccanta[パッチャンタ]は名詞と考えても形容詞と考えてもどちらでもかまわないと思います。「辺地、辺地の」という意味です。gāmako[ガーマコー]は「小村」という意味の男性名詞 gāmaka[ガーマカ]の単数主格です。この場合もコンパウンド(合成語)になっています。結局、意味は「人里離れた小さな村があった」といったところでしょうか。

T:いやー、B君もかなり要領がわかってきたようですね。その調子ですよ。ねえ、A君もそう思いませんか。

A:ええ、たいしたもんですよ。

B:そんなに褒めていただくと恥ずかしくなってしまう。まだまだわからないところだらけですから、これからも自分なりにこつこつとやっていきたいと思っていますので、先生もA君もどうかよろしくお願いします。

T:それでは最後に、全体を訳しておくことにしましょう。

「菩薩は、兔の胎内に生じて森に住んでいらっしやった。また、その森の一方には山麓が広がり、一方には川が流れており、一方には人里離れた村があった。」

いかがでしたでしょうか。パーリ語の勉強会の雰囲気のようなものを少しでも感じ取っていただけたでしょうか。

さて、ここでまた、文法の説明に戻らせていただくことにします。

今回は、いよいよ動詞です。名詞の変化(曲用)も大変でしたが、パーリ語の動詞の変化(ふつう「活用」と呼んでいます)もそれに劣らず大変です。

これも、まずは『パーリ語辞典』の最後の動詞の活用のところを見ていただきたいと思います。全部で20ページはあるでしょうか。思わずため息が出てしまいそうです。

いちいち説明していてもあまり意味がありませんから、名詞同様ごくおおざっぱな説明だけにとどめることにします。細かいことについては、そのつど文法書をご覧になって確認していただければと思います。

動詞の変化は、意味のうえでは、時間を表す場合とそれ以外の場合の2つに分けて考えればいいのかと思います。

時間というのは、いわゆる現在形、過去形、未来形、完了形などと呼ばれているもののことです。パーリ語はこれらを、すべて動詞の語尾を変化させることによって表します。

ここではそれらを代表して gacchati [ガッチャティ](行く)の現在形がどのように活用するのか見てみることにしましょう。

gacchati

能動

sg.

1. -mi	gacchāmi
2. -si	gacchasi
3. -ti	gacchati

pl.

1. -ma	gacchāma
2. -tha	gacchatha
3. -nti	gacchanti

『パーリ語辞典』には、この下に「反照」と書かれた変化表が載っています。この「反照」については、文法書にいろいろと説明も載っていますが、実際にパーリ語の文章を読んでいくうえでは、ほとんど支障がありませんから、「こういう風に変化する場合もあるのだな」ぐらいに思っていいただければ充分かと思います。

次回は具体例をとおして、実際に文中に出てくる動詞の現在形を見ていきたいと思っています。

パーリ語 アイウエ?オ(11)

それでは、具体例を見ながら、実際に動詞の現在形がどのように使われているかを見ていくことにしましょう。

- (1) *Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi.*
- (2) *Veramaṇīsikkhāpadaṃ samādiyāmi.*
- (3) *Bhagavā Bārāṇasiyaṃ viharati.*
- (4) *Paṭisaṅkhā yoniso cīvaraṃ paṭisevāmi.*

- (1) は、*tisaraṇagamaṇa* [ティ・サラナ・ガマナ](三帰依)の出だしの文句です。三帰依の文句は、すべて *gacchāmi* という語で終わっています。

gacchāmi は、*gam*[ガム](行く)という動詞の現在一人称単数の形です。一人称単数とは、具体的には、「私」ということですから、*gacchāmi* は「(私は)行きます」という意味になります。

英語を習った方はお気づきになると思いますが、英語で「私は行きます」は、ふつう、「I go」と言い、ただ *go* とは言いません。*Go* だけだと命令形になって、「行け」という意味になってしまいます。英語はこのように、基本的に主語を省略できない言葉なのです。

一方、パーリ語はどうかというと、主語のない文は、探せばいくらでもあります。*Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi.* は、「私はブツダに帰依いたします」という意味ですが、どこにも「私」を表す語は見あたりません。それでも、ちゃんと「私はブツダに帰依いたします」という意味になるのです。

なぜ、パーリ語は英語と違い、このように主語を省略しても問題が起こらないのでしょうか。それは、パーリ語の動詞が、主語の人称、数に合わせて語尾変化してくれるからなのです。英語はこの動詞の語尾変化のほとんどすべてを、長い歴史のなかで捨ててしまったために(かろうじていわゆる3単現の-sが残っているくらいです)、人称、数を表す主語をどうしても省略することができなくなってしまったのです。

- (2) は、*pañcasīlasamādāna* (五戒文)に出てくる文句です。*samādiyāmi* が動詞だというのは見当がつくと思います。(1)と同様、語尾が-miで終わっていますから、「(私は)(~から)離れるという戒を守ります」という意味になります。

(3) は、以前、名詞の口カティブ(処格)のところでも例としてあげたことがありますが、*Dhamma cakka pavattana sutta* (大転法輪經)の出だしの一部分です。

この文には、*Bhagavā* (*bhagavant* の単数主格。世尊は)という主語があります。その主語が三人称単数ですから、動詞は *viharati* (住む)という形になっています。直訳は、「世尊はベナレスにいらっしゃる」となります。ただし、この場合の現在形は、過去のことを述べていると考えて(このように、現在形なのに過去のことを表す用法を、文法用語ではふつう「歴史的現在」と呼んでいます)実際は「世尊はベナレスにいらっしゃった」という意味になります。

(4) は、*Catupaccavekkhanā* (4つの観察)の出だしの一部分です。

Paṭisaṅkhā は「観察する」という意味の動詞 *paṭi-saṅkhati* のジェラントと呼ばれる形です。ジェラントについてはまた後で触れる予定ですので、ここではひとまず「~して」と訳しておくことにします。

yoniso はもともと *yonī* (子宮)の奪格(アプラティブ)の形です。以前にも触れましたが、名詞の目的格や奪格などが独立した副詞に変化してしまうことがあります。この場合の *yoniso* も「根源より、如実に」のような意味の副詞になっています。

cīvaraṃ は *cīvara* (衣)の目的格(アキュザティブ)です。

paṭisevāmi が動詞で一人称単数現在です。

結局全体で、「(私は)正しく観察して衣を受用します」となります。

(文責：小野道雄)

パーリ語 アイウエ?オ(12)

今回は、動詞の現在形のお話をしました。

ひとつ、大切なことを追加しておきます。それは、パーリ語の辞書は、動詞の見出し語が3人称単数現在形の語尾で出てくるということです。たとえば、「住む」は viharati、「行く」は gacchati のように、です。

今回は、動詞のアオリストと呼ばれる形について見ていくことにします。聞き慣れない文法用語ですが、とりあえず過去形のことだと思っていただければ結構です。

個々の語尾変化についてはここでは取り上げませんので、『パーリ語辞典』の活用表の方をご覧ください。

それではさっそく、いくつか具体例を見ていくことにします。

- Bhagavā pañcavaggiye bhikkhū āmantesi.
(バカヴァー パンチャヴァッギエー ビックー アーマンテーシ)

これは、『転法輪経』(Dhammacakkapavattana-sutta)のなかの一文です。復習をかねて一語ずつ確認していくことにしましょう。

Bhagavā は bhagavant の3人称単数ノミナティヴ(主格)で「世尊は」となります。次の pañcavaggiye は、pañca「五」と形容詞 vaggiya「群の」のコンパウンド(合成語)で、「五群の」。次の bhikkhū が bhikkhu の複数アキュザティヴ(目的格)になっているので、vaggiya という形容詞もそれにあわせて vaggiye という複数アキュザティヴの語尾になっています。形容詞はこのように名詞の語尾変化にあわせて語尾変化をすることにご注意ください。

最後の āmantesi が āmanteti (話す)という動詞のアオリストです。過去形と考えればよいのですから「話した、言った、呼びかけた」などと訳せばいいわけです。

全体で「世尊は、五群比丘たちにおっしゃいました」という意味になります。

なお āmanteti (話す)は、日本語が「～に話す、言う」となりますので、つい「～に」の部分を与格(デイティヴ)にしたくなってしまうかもしれませんが、目的格(アキュザティヴ)が来ますので、ご注意ください。これは、英語の tell (話す、言う)が、tell him のように目的格が来るのと同じだと考えていただければよろしいと思います。

- Cakkhuṃ udapādi ñāṇaṃ udapādi paññā udapādi vijjā udapādi āloko udapādi. (チャクン ウダパーディニャーナン ウダパーディ パンニャー ウダパーディ ヴィッジャー ウダパーディ アーローコー ウダパーディ)

これも、『転法輪経』(Dhammacakkapavattana-sutta)のなかの一節です。この文は主語と動詞しかありませんから、とても簡単です。

Cakkhuṃが主語、udapādi が動詞。その次も ñāṇaṃが主語、udapādi が動詞。同じように paññā が主語、udapādi が動詞。vijjā が主語、udapādi が動詞。āloko が主語、udapādi が動詞というふうになっています。

ここで名詞のいわゆる曲用の復習もしておくことにしましょう。

最初の Cakkhu (眼)とñāṇa (智)は、両方とも主格(ノミナティヴ)の語尾が-ṃになっていますからこれらの名詞が中性名詞でしかも単数形だということがわかります。

paññā と vijjā は実はちょっとわかりにくいのですが、udapādi という動詞の語尾から、女性名詞の単数形だということがわかります。

udapādi が uppajjati (生ず)のアオリストです。主語が3人称単数の場合の語尾になっています。

全体の意味は「(智慧の)眼が生じ、智が生じ、慧が生じ、明が生じ、光明が生じた」となります。

(文責：小野道雄)

今回は、過去を表すアオリストという形について説明しました。

動詞には、これ以外にもいろいろな形があります。よく出てくる形としては、現在形、アオリスト（過去形）のほかに、未来形、命令法、願望法などがあります。

ところで、動詞を分類する際に、正式には「～法～形」というような表現を用います。たとえば、最初に出てきた現在形は、正確には「直説法現在形」といいます。同じように、未来形は、正確には「直接法未来形」といいます。

ただし、パーリ語の文法を専門に勉強するのでもないかぎり、そのような煩わしい分類に神経を使う必要はないと思います。実際、「法」などという考え方はとてもむずかしく、誰にでも理解できるというものでもありません。要は、それぞれに決まった動詞の語尾変化があるのだということがわかっていればいいのです。

未来形、命令法、願望法の語尾変化もここではいちいち説明しませんので、必要に応じて、『パーリ語辞典』の動詞の活用のページをご覧ください。

まず未来形の具体例を見てみることにしましょう。

- Tato paṭṭhāya imaṃ pi rukkhaṃ jhāpessati.

(タトー パッターヤ イマン ピ ルッカṃ ジャーベッサティ) これは、『鳥の本生譚』(Sakuṇa-jātaka)のなかの一文です。

一語一語見ていくことにしましょう。tato は taṃ (それ)の奪格(アブラティブ)で、paṭṭhāya は paṭṭhahati (出発する)のジェラントと呼ばれる形です。以前にも出てきましたが、パーリ語では、このジェラントがとてもよく出てきますので、後で改めて取り上げます。この場合は、英語の前置詞の adter (～の後で)のような働きをしていると考えていただければ結構です。ただし、名詞が必ず前置詞の前に置かれる(だから「前置詞」といわれるのですが)英語などとは異なり、名詞は前置詞の前にも後ろにも来ることができます。また、前置詞によって、名詞の格が決まってくることにもご注意ください。paṭṭhāya は名詞のアブラティブ(奪格)とともに用いることになっているので、taṃ が tato というアブラティブ(奪格)の形になっているのです。Tato paṭṭhāya で「その後」ぐらいの意味になります。

次の imaṃ は imaṃ (この)のアキュザティブと考えます。pi (また)の次の rukkhaṃ は rukkha (木、中性名詞)の単数目的語と考えます。最後の jhāpessati がこの文の動詞で、jhāpeti (ジャーペーティ)(～に火をつける)の未来形になっています。

直訳すると、「またその後、この木に火をつけることになるだろう」、意識すれば「そしてこの木にも燃え移るだろう」となります。

次は命令法の例を見てみましょう。

- Sabbe sattā sukhitā hontu. (サッペー サッター スキター ホントウ)

「生きとし生けるものは幸せであれ」という意味ですが、最後の hontu が、hoti (ある、いる)の、主語が三人称複数の場合の命令法の形になっています。「ある、いる」という意味を表す動詞にはもうひとつ bhavati (バヴァティ)というのがあり、この場合は bhavantu (バヴァントウ)になります。

最初から見ていくと、sabbe は sabba (すべての)という形容詞の三人称複数ノミナティブ(主格)の形で、次の sattā を修飾しています。sattā は男性名詞 satta (衆生、有生)の複数ノミナティブで、この文の主語になっています。sukhitā は「幸福の」という意味の形容詞の男性三人称複数主格の形です。主語の形に合わせているわけです。ちなみに、この文などは日本語の語順とまったく同じなので、不思議な気がしてしまいます。

(文責：小野道雄)

パーリ語 アイウエ?オ(14)

前回は、命令法のお話をしましたので、今回は願望法についてお話しします。

願望法は比較的よく目にしますから、慣れておいた方がいい形です。願望法というくらいですから基本的には願望の意味を表しますが、その他にもいろいろな意味を表します。具体例を見てみましょう。

Na paresaṃ vilomāni
(ナ パレーサン ヴィロマーニ)
na paresaṃ katākataṃ
(ナ パレーサン カターカタン)
Attanova avekkheyya
(アッタノーヴァ アヴァツケイヤ)
katāni akatāni ca.
(カターニ アカターニ チャ)

Dhammapada (ダンマパダ) の偈です。一つひとつ見ていくことにしましょう。

na は、英語の not や no に相当します。否定の意味を表したいときに用います。

paresaṃ は para の変化形です。文法的には、para は「他の」という意味で、代名詞的な変化をする形容詞と書かれています。ここでは「他人」という意味の名詞として使われています。複数属格で、「他人の」という意味になります。

vilomāni のもとは viloma です。これも辞書では「逆の」という意味の形容詞となっていますが、ここでは、「誤り」という意味の名詞として使われています。中性名詞で複数目的格になっています。「誤りを」という意味になります。

katākataṃ は kata と akata の、いわゆるコンパウンド(合成語)です。kata はもともと karoti (作る、成す ~ 英語の make) という動詞の、いわゆる過去分詞です。英語の現在分詞や過去分詞と同じように、基本的に形容詞の働きをするのですが、名詞的に用いられることもしばしばあります。ここでも「成されたこと、成したこと」という意味の名詞として使われています。kata に a- という「反、非、否」の意味を表すいわゆる接頭字がついたものが akata です。「成されなかったこと、成さなかったこと」という意味になります。両方合わせて「成したこと成さなかったことを」という意味になります。目的格になっています。

Attanova は、attanō と eva が連声(sandhi サンディ)のルールに従って、eva の最初の e が落ちてしまい、attanōva とつながってしまったものです。Attano は、attan (自己) という意味の男性名詞の単数属格で、「自分の」という意味になります。eva は副詞で、ここでは「のみ、だけ」という意味で用いられています。英語の only に相当します。

次の avekkheyya が、「観察する、よく見る」という意味の動詞 avekkhati の願望法です。avekkheyya は主語が二人称単数(あなた)の場合の形です。

願望法はいろいろな意味を表しますが、ここでは穏やかな命令法のように使われています。「よく見なさい」といったところです。

最後の ca は英語の and に相当します。ただし and とは、置かれる場所が微妙に違いますから注意してください。「A と B」という場合、英語では「A and B」となるのですが、ca を用いると「A B ca」となってしまいます。この語順は、慣れるまではかなり抵抗感があるかもしれません。「成されたことと成されなかったことを」という意味になります。両方とも中性名詞の単数目的格です。

結局全体では、おおよそ次のような意味になります。「他人の誤りや、他人が(やってはいけないのに)やったこと、また、他人が(やらなくてはいけないのに)やらなかったことを見るのではなく、自分が(やってはいけないのに)やったこと、また、自分が(やらなくてはいけないのに)やらなかったことだけを見るようにしなさい」。

(文責：小野道雄)

パリー語 アイウエ?オ (15)

今回は、動詞の変化形のひとつとしてジェラントと呼ばれるものについてご説明したいと思います。

パリー語の文章を読んでいると、-tvā (トゥヴァー) という語尾で終わる単語を目にすることがよくあります。これがジェラント (連続体) と呼ばれるもので「~して~して」と言いたいときに用いられます。

それでは、ジェラントが出てくる具体例を見ていくことにしましょう。やはり復習を兼ねて、その他の文法事項も一つひとつ確認していくことにします。

以前にも出てきた “ Sasajātaka ” の中の一節です。

Ath'eko bālisiko satta rohitamacche uddharitvā
(アテ-コー バ-リシコー サッタ ローヒタマツチエー ウッダリトゥヴァー
valliṃyā āvūṇitvā netvā Gangātire
ヴァリヤアー アヴァニトゥヴァー ネットヴァアー ガンガ-ティレ
vālikāya paṭicchādetvā.....
ヴァリカヤ パティチャ-テ-トゥヴァー) これは、漁夫が捕った魚を、ガンジス川の岸辺に埋めて隠すところ
です。

最初の Ath'eko は、Atha (アタ) と eko (エーコー) がサンディ = 連声によって、Ath'eko (アテ-コー) になったものです。

Atha は、「時に」という意味の副詞です。eko は eka (エーカ)「一つの」の男性単数主格の形です。bālisika (バリーシカ)「漁夫、男性名詞」の単数主格の bālisiko (バリーシコー) を修飾しているので、それに合わせて eka も eko という、同じ形になっています。

satta (サッタ) は「七」、rohitā (ローヒタ) は「赤い」、macche (マツチエー) は前後関係から、maccha (マツチャ)「魚、男性名詞」の複数目的格だとわかります。

satta、rohitā は、ともにここでは、次の macche との合成語 (コンパウンド) の一部になっているので、格変化はせずにそのままの形で用いられています。「七尾の赤い魚を」という意味になります。なお「赤い魚」のところですが、辞書には rohitā の意味として「魚の一種」とも書いてありますから、rohitā という名前の魚のことかもしれません。

次の uddharitvā (ウッダリトゥヴァー) がジェラントです。もともとは uddharati (ウッダラティ)「揚げる」という動詞です。

uddharati は、dharati (ダラティ)「保持する」という動詞に、ud- (「上に」という意味のいわゆる接頭辞) がついている構造になっています。このように接頭辞というものをある程度知っていると、単語の意味を考える際に、とても役に立つことが多いのです。ついでに、dharati という動詞のいわゆる名詞形がサンスクリット語では dhāraṇī (ダーラニー) となり、日本でもそのまま「陀羅尼」として使われています。丸薬の「陀羅尼助」でもおなじみです。

「時に、一人の漁夫が七尾の赤い魚を釣り上げ」
(釣り竿で釣り上げたのか、それとも網を使ったのかよくわかりませんので、とりあえず「釣り上げて」としておきました)

次の valliṃyā は valli (ヴァリ)「つる草、女性名詞」の単数形で、格については前後関係から、具格 (インストルメンタル) だとわかります。āvūṇitvā が āvūṇāti (アーヴナーティ)「紐を通す、紐で結ぶ」という動詞のジェラントです。

「時に、一人の漁夫が七尾の赤い魚を釣り上げ、つる草で結んで」

このように、「~して~して」と行為が連続して行われるときにジェラント (連続体) が用いられますから、物語などではこの形が頻繁に使われることになるのです。

パーリ語 アイウエ?オ (16)

前は、「～して」という意味を表すジェラントという動詞の形についてお話をしました。ジェラントに関しては、一切語尾変化をしないということについてもご注意ください。(語尾変化をしないというだけで、正直言って思わずホッとさせていただきます)

もう一つ、語尾変化をしない動詞の形に「不定体」というものがあります。これは英語のいわゆる to 不定詞とほとんど同じものですから、英語的に「不定詞」と言った方が言い慣れていて良いかもしれません。不定詞の形は、動詞の最後に-tuṃという語尾がついている場合がほとんどです。-tuṃ以外の語尾については『パーリ語辞典』をご覧ください)

英語の *tant to ~* のように、特定の動詞と共に用いられる場合がほとんどです。

たとえば、「～することができる」という意味の *sakkoti* [サッコーティ] (= *be able to*) や、「～することを欲する」という意味の *icchati* [イッチャティ] (= *want to*) などと共に用いられます。

Dātuṃ na sakkomi.

[ダートウン ナ サッコーミ]

(私は) 与えることはできない。

Dātuṃ が *dadāti* (与える) の不定詞。

na は否定の *na*。 *sakkomi* は *sakkoti* の一人称単数現在の形。

Pucchituṃ icchāmi.

[プッチトウン イッチャーミ]

(私は) 尋ねたい。

pucchituṃ が *pucchati* (尋ねる) の不定詞。 *icchāmi* は *icchati* の一人称単数現在の形。

次は、動詞の変化形の中でも、名詞や形容詞のように語尾変化をするものについてのお話です。

このあたりまで来ると、だんだん頭の中がこんがらがってくるものですが、ぜひ乗り切っていただきたいと思います。

英語の動詞の変化のひとつに、過去分詞というのがあったのを覚えていらっしゃるでしょうか。受身形や完了形などで用いられるあの形です。

パーリ語にも同じように、過去分詞と呼ばれる動詞の形があります。文法書には、過去分詞として過去受動分詞と過去能動分詞の2種類が載っていますが、過去能動分詞のほうは滅多にお目にかかりませんから、ほとんど意識する必要はありません。実はこれからお話しする「過去分詞」は、「過去受動分詞」のことなのですが、いちいち「過去受動分詞」と言うのも面倒ですから、英文法でもおなじみの「過去分詞」という用語を使うことにしました。

「パーリ語辞典」も pp. の略号を用いています。pp. は「past participle=過去分詞」の略です。

パーリ語の過去分詞は、動詞の最後に *-ta* をつければ OK です。この場合も他の場合同様、いろいろ細かいルールがありますので、一度は文法書に目を通していただいた方がいいと思います。しかし結局は、何度も何度もパーリ語の文章を読んでいるうちにそのような細かい文法事項もある程度「見えて」くるようになるのではないのでしょうか。特にパーリ語のような言語はまさに「継続は力なり」の見本のようなものだと思います。

いくつか過去分詞の具体例を見てみることにしましょう。

gacchati (行く) *gata*

vasati (住む) *vasita*
vuttha

patati (落ちる) *patita*

tiṭṭhati (立つ) *ṭhita*

karoti (成す) *kata*

carati (歩く) *carita*

cinna

chindati (切る) *chinna*

chindita

phusati (触る) *phusita*

phuṭṭha

(次号につづく)(文責; 小野道雄)

今回も過去分詞のお話です。

実際に過去分詞をご覧になればおわかりになると思いますが、ごく大ざっぱに言ってしまえば、語尾が、-ta、-na となっていれば、それは過去分詞だと思ってまず間違いありません。

過去分詞に関して大切なことは、前回は申し上げたように、名詞や形容詞と同じようにいわゆる格変化をすることです。

過去分詞の意味を考える場合、やはり英語の過去分詞を参考にするのが有効です。

He was scolded.
(彼は叱られた。)

the student scolded by the teacher
(その先生に叱られた生徒)

パーリ語の過去分詞も、上のように、文中でいわゆる補語になる場合と、名詞を修飾する場合とがあります。ただ、英語と違い、パーリ語ではいわゆる他動詞だけでなく自動詞の過去分詞もたくさん出てきますから注意してください。他動詞の場合は受け身の意味になりますが、自動詞の場合は当然、受け身の意味にはなりません。

実際にパーリ語で過去分詞を使った文を見てみましょう。

Puriso āgato.
[プリソー アーガトー]
(人が来た。)

āgato は āgacchati (来る) の過去分詞の āgata が、主語に合わせて格変化をしたものです。この場合、「来る」は自動詞ですから受け身の意味にはなりません。

ここでもう一つご注意いただきたいのは、英語で言えばいわゆる be 動詞のようなものが見あたらないということです。パーリ語ではこのような場合、be 動詞のようなものは使わないことが多いのです。

そうすると「時制」つまり時間はどうなるのかという問題が出てきます。時間を表すのは動詞の役割だからです。

基本的に過去分詞が出てきたら、時間は、「過去」「現在完了」「過去完了」などが表す時間だと考えていただければ結構です。実際はほとんどの場合、「～した」で大丈夫です。

もう一つ具体例を見てみることにしましょう。

Rukkho chindito.
[ルッコー チンディトー]
(木は切られた。)

chindito rukkho
(切られた木)

最初の文から見ていきましょう。rukkho は rukkha (男性名詞、木) の単数・主格の形です。chindito は chindati (切る) の過去分詞 chindita が主語に合わせて、同じ単数・主格の語尾に変化したものです。「切る」は他動詞ですから、当然「切られた」と受け身になります。

下の方は文ではありません。過去分詞が名詞を修飾しているだけですから、「切られた木」となります。もう一つ具体例を見てみましょう。

Uppatitvā aññattha gatā.
[ウッパティトウヴァー アンニヤッタ ガター]

Uppatitvā は動詞 uppatati (飛び立つ) のジェランド。「～して」と訳せば OK です。aññattha は副詞で、「他の場所へ」。次の gatā が gacchati (行く) の過去分詞です。省略しましたが、主語は paṇḍitā sakuṇā (賢い鳥たち) ですので、それに合わせて過去分詞も複数・主格の語尾になっています。「行く」は自動詞ですから受け身の意味にはなりません。

「(賢い鳥たちは、) 飛び立って他の場所へ行きました」という意味になります。(次号につづく)

パーリ語 アイウエ?オ (18)

前回まででおおよその文法事項には触れましたので、今回からしばらく、実際にパーリ語の長文を読みながら、文法の復習をしていきたいと思います。読み物は、おなじみの『ジャータカ』(本生譚)のひとつ Sakuṇajātaka (サクナ ジャータカ 小鳥本生譚)です。なお、原文のテキストは PTS 版(パーリ・テキスト・ソサイエティー)のものを使い、日本語訳はその英語訳を参考にしました。

Aṭṭe Bārāṇasiyaṃ.

[アティーテー パーラーナスイヤン]

Brahmadatte rājjaṃ

[ブラフマダッテ ラッジャン]

kārente Bodhisatto

[カーレンテ ボーディサットー]

sakuṇayoniyaṃ

[サクナヨーニヤン]

nibbattitvā

[ニッバッティトゥヴァー]

sakuṇasaṃghaparivuto

[サクナサンガパリウトー]

araññāyatane

[アランニャーヤタネー]

sākhāvīṭṭapasampannaṃ

[サーカーヴィタパサンパンナン]

mahārukkhaṃ nissāya

[マハールッカン ニッサーヤ]

vasati.

[ヴァサティ]

このくらい長い文章だと、読む前から嫌な予感がして、思わず身構えてしまうものです。まず、発音は大丈夫でしょうか。ほとんどローマ字読みで OK なのですが、e と o はそれぞれ [エー][オー]と長く伸ばして発音することに気をつけてください。Aṭṭe は [アティーテ]ではなく、e を長く伸ばして [アティーテー]、Bodhisatto は、[ボディサット]ではなく、同様に o を長く伸ばして [ボーディサットー]という発音になります。それでは、一語一語丁寧に見ていくことにしましょう。

話が少しそれますが、英語が苦手な生徒にたとえば「This is a book.の book って何だかわかる?」と聞くと、ほとんどの場合、「本、でしょう」と答えます。これに対して、本当に力のある生徒の場合は違います。どういう答えが返ってくるかという「名詞で補語になっています」と、訳ではなくまず文法的な説明が返ってくるのです。パーリ語を読んでいく場合も、何はさておきまず文法的に考える習慣を身につけることが大切です。パーリ語は「語尾変化」が命の言語です。とにかく、単語が出てきたら、語尾つまり最後の方をよく観察して、文法的に何なのかを発見しなければいけません。実際初心者には、それはまさに「発見」という表現がぴったりです。発見するまでにおおげさではなく、何時間も、いやひどい場合は何日もかかる場合もあるかもしれません。しかしそれだけに、発見できたときの爽快感もひとしおなのです。それでは最初の Aṭṭe から見ていくことにしましょう。

最後が e [エー]で終わっている場合は、まず名詞のいわゆる処格(ロカティヴ)ではないかと疑ってみます。すると、もとの名詞の最後は -ta、ということは「あ、ひょっとしたら、-ta は過去分詞の語尾の可能性があるので……これは、ある動詞の過去分詞が名詞として使われていて、その処格の可能性が高いぞ」とまあ、こんなふうに推理していくわけなのです。

(次号につづく)

パーリ語 アイウエ?オ(19)

(承前) Atīte は、そういうわけで動詞の過去分詞が名詞化したものの処格(ロカティヴ)だろうと見当をつけます。ロカティヴは副詞が形容詞の働きをします。この場合はとりあえず副詞の働きをしていると考えます。辞書を引くのは一番最後です。そこには「昔」という訳が載っています(この「昔」は名詞ではなく副詞です)。

これで最初の Atīte に関する「文法的考察」はおしまいです。「めんどくさい!最初から辞書を引いて訳だけ調べればそれでいいんじゃないですか?」という声が聞こえてきそうです。しかし勉強がある程度進んでくると文法なしではやっていくことはできなくなってきました。

次の Bārāṇasiyaṃ は大文字で始まっています。それで、地名や人名などの固有名詞だということが分かります。語尾は

- aṃ になっています。ある人はこう考えるかもしれません。

「- aṃ という名詞の語尾は男性名詞の単数目的格(シンギュラー・アキュザティヴ)だったぞ。」「いやいや、中性名詞の単数主格(シンギュラー・ノミナティヴ)も語尾は -aṃ になるはずだ。」と考える人もいるかもしれません。

いずれにしてもそうだとすれば辞書に Bārāṇasiya という名詞が載っていなければなりません。ところが実際に辞書を引いてみると、Bārāṇasī という単語はありますが、Bārāṇasiya という単語はどこを探しても見当たりません。そこで「あっ、そうか。これは -ī で終わる女性名詞の格変化かもしれない。」と気付くこととなります。- iyaṃ は -ī で終わる女性名詞の単数処格なのです。

結局ここまでの訳は、「昔、ベナレスで」となって、物語の出だしとしてはぴったりです。

「よし、これはいけそうだ。」とつい思ってしまう。ところがそうは簡単にいかないのがパーリ語です。

次の Brahmadaṭṭe を見てみましょう。やはり大文字で始まっていますから、これも固有名詞です。

Devadatta (デーヴァダッタ)の名前を聞いたことのある人なら、Brahmadatta も人名だと予想がつきます。語尾が - e ということは、男性名詞の単数処格か複数目的格ということです。この場合は固有名詞ですから複数ととるのはちょっと無理があります。単数処格と考えるのが妥当です。

処格は、「処(ところ)」という漢字からも分かるように、もともと場所(あるいは時間)を表すときに用いられる格です。Bārāṇasiyaṃ はベナレスという場所を表していますから問題ありません。今回は地名ではなく人名ですから困ってしまいます。「ブラフマダッタにおいては、というような意味にでもなるのかな」と考える人もいるかもしれません。実はその後に出てくる Kārente という単語が鍵を握っています。- nte という語尾からなんとなく動詞の現在分詞かなということが分かります。現在分詞は格変化をします。- e という語尾は Brahmadaṭṭe の語尾 - e と同じ処格だろうと見当をつけます。

Kāreti はよく出てくる動詞 karoti の使役形です。パーリ語などでは「使役(～させる)」の意味にはそれほどこだわる必要はありません。ですから kāreti も karoti と同じように「～を作る・成す」と訳しても特に問題はありません。これですぐ前にある rajjaṃ と現在分詞の kārente とが意味のうえでうまくつながります。rajjaṃ は、kārente のもとの動詞 kāreti の目的語になっていると考えるのが一番自然です。「王権を成す」つまり「国を治める」という意味になります。

それでは、Brahmadaṭṭe (名詞の処格)とその後に続く kārente (現在分詞の処格)というふたつの処格(ロカティヴ)の正体は一体何なのでしょう。

ここで、処格に関連してぜひ知っておいたほうがいいことのひとつに「絶対処格(ロカティヴ・アプソリュート)」があります。英語の文法を御存じのかたなら、いわゆる「独立分詞構文」を思い出していただければ理解しやすいかもしれません。「絶対処格」という言葉が馴染めなければ、かわりに「独立分詞構文」と呼んでもかまいません。

実は、Brahmadaṭṭe rajjaṃ
kārente は、その「絶対処格」なのです。(次号につづく)

(文責; 小野道雄)

パーリ語 アイウエ?オ(20)

ブラフマダッター ラッジヤン カーレンター

今回は Brahmadatte rajjaṃ kārente の部分がいわゆる「絶対処格」と呼ばれるものだというところまでお話しました。

この「絶対処格(ロカティヴ・アブソリュート)」は、前回も申し上げましたように、英語の文法を御存じの方なら、「独立分詞構文」とほとんど同じようなものだとお考えになっていただければ結構だと思います。

パーリ語の場合は、意味上の主語になる名詞とその後に来る現在分詞が処格になるところが、英語との決定的な違いです。

形 名詞の処格 + 現在分詞の処格

意味 ~がしているとき

・あいだ

Brahmadatte rajjaṃ kārente の部分をあらためてご覧になって下さい。

Brahmadatte は Brahmadatta の処格、kārente は kāreti の現在分詞 kārent の同じく処格になっています。これでこの部分をすっきり訳すことができます。

「昔、ベナレスでブラフマダッタ(王)が国を (rajjaṃ = rajja の対格) 治めていたとき」

この後はかなり長い文になりますから、じっくり見ていくことにしましょう。

Bodhisatto sakuṇayoniyam nibbattivā

sakuṇasamghaparivuto araṇṇāyatane

sākhāviṭapasampannam

mahārukkham nissāya vasati.

最初の Bodhisatto は、語尾が -o ですから男性名詞の単数主格です。つまりこの語がこの長い文の主語だということが分かります。主語があれば普通それに対応する述語動詞があるはずですから、まず動詞探しから始めることにしましょう。この場合もその後に出てくる単語の語尾をざっと見ていくのがベストです。

Bodhisatto の後には合計8個の単語がありますが、その中で最後の単語だけが -ti の語尾なのが目にとまります。-ti は動詞の三人称単数現在の語尾と思ってまず間違いありません。この場合、主語の bodhisatto は三人称単数ですからちゃんと対応しています。

「菩薩は・・・お暮らしになっていた」と意味も通ります。

次は主語と述語動詞に挟まれた部分ですが、前後関係を考えれば、おそらく、どこでどのようにお暮らしになっていたかということが述べられているだろうということは見当がつきます。

sakuṇayoniyam nibbattivā の部分から順に見ていくことにしましょう。

この部分は以前いわゆるジェランド(普通、「~して」と訳す)の説明のところでも具体例として引用したことがありました。ジェランドの語尾 -tvā は本当によく出てきますし、語尾変化もしませんから、比較的よく記憶に残るもののひとつだと思います。

nibbattivā は nibbattati (生まれる)のジェランドですから、「お生まれになって」となります。

sakuṇayoniyam は sakuṇa と yoniyam という別々の単語が結合してできたいわゆるコンパウンド(「複合語」とか「合成語」とも言います)と呼ばれるものです。パーリ語ではこのコンパウンドが実に頻繁に出てきますので、コンパウンドの理解は必須になってきます。面倒でも一度は文法書のコンパウンドのページをご覧になることをお勧めします。「六合釈」とか「有財釈」などという今まで聞いたことも見たこともないような文法用語が出てくるので面食らうのではないかと思います。コンパウンドについては、とりあえず以下のふたつのポイントを頭に入れておいてください。

・コンパウンドを構成している複数の単語間の文法的な関係を正確に把握し、意味を取り違えないようにする。

・最後の構成語だけ語尾変化する

パーリ語アイウエ?オ(21)

次の *sakuṇasaṅghaparivuto* もコンパウンド(複合語)です。次の三つの単語から成り立っています。

sakuṇa saṅgha parivuto

saṅgha は「サンガ」でおなじみですから、だいたい意味の見当は付くと思います。

parivuto も、もとの形が *parivuta* だと分かれば、語尾から過去分詞かなとこれも見当が付きます。

parivuta は「～を囲む」という動詞の過去分詞です。

parivuto は、語尾が *-o* になっていますから主格です。

主語は最初の *Bodhisatto* ですから、「(菩薩が) 囲まれていた」ということになります。

そうすると、*parivuto* と *sakuṇa* と *saṅgha* の意味のつながりが見えてきます。

sakuṇasaṅgha を「鳥の集団」と考え、全体を「鳥の集団に囲まれて」と考えれば意味が通ります。もちろん、この場合は「囲まれていた」と言っても当然その鳥の集団の指導者として他の鳥たちに囲まれていたということです。実際は、「鳥たちのリーダーとして」のように意識すれば自然な日本語になると思います。

このように、コンパウンドは構成要素の単語と単語の関係をできるだけ正確に把握し、意味を取り違えないようにしなければいけません。

次の *araññāyatane* もコンパウンドです。コンパウンドも、ある程度パーリ語の語彙数がないと、どこでどのように区切っているかなかなか難しい場合があります。

この場合も、*arañña* (森)の次の単語が *ayatane* なのか *āyatane* なのかが難しいところです。最後は面倒でもいちいち辞書を引いて確かめるしかありません。辞書を引いてみると、*āyatana* (場所) という名詞があります。「森」との意味のつながりもうまくいきそうです。「森の場所」つまり「森」ということです。*-e* は処格の語尾ですから、結局全体で「森で」という意味になります。

次の *sākhāvīṭapasampannaṃ* もコンパウンドです。これくらい長いコンパウンドになると、パーリ語の語彙数が少ない者にとっては本当に大変です。どこでどう区切ったらいいか途方に暮れてしまいます。そうなったら、もう、だいたいの見当を付けて手当たり次第に辞書のページをめくって、その単語があるかないかを確かめていくしか他に手がありません。

その結果、このコンパウンドは、*sākhā* (枝) *viṭapa* (幹) *sampanna* (具足せる)の三つの単語から成り立っていることが分かります。

sampanna [サンパンナ]は、経典などでも比較的よく目にする単語です。この場合は、「～を有する、～がある」ぐらいの意味にとればいいのかと思います。そうすると、前の二つの単語とのつながりも見えてきます。「枝と幹を有する」と解釈すれば意味が通ります。

ところで、コンパウンドは最後にくる単語だけは語尾変化をします。この場合は、最後の単語の *sampanna* が *sampannaṃ* と格変化をしています。問題は、この *-aṃ* という語尾は一体何かということです。ここらあたりから「頭の体操」が始まることになります。考え方の一例を以下順を追って示してみます。

- (1) *sampanna* はもともと過去分詞である。ということは形容詞の働きをしていると考えればいい。
- (2) ところで、すぐ後には *mahārukkhaṃ* という単語がある。
- (3) ところで *sampannaṃ* も *mahārukkhaṃ* も語尾が同じ *-aṃ* である。
- (4) ということは *sampanna* という形容詞が後の *mahārukkhaṃ* という名詞を修飾していると考えるのが妥当である。
- (5) ところで *mahārukkha* は男性名詞であるから *mahārukkhaṃ* は目的格である。
- (6) ではなぜ目的格になっているのだろうか。
- (7) たぶん、すぐ後の *nissāya* が最後の *vasati* と関係があるのだろう。
- (8) ところで *vasati* は動詞で「住む」という意味だから、なんとなく目的格の名詞とは結びつかないような気がする。

そこで *nissāya* という語を辞書で引いてみることになります。すると..... (続く)

パーリ語アイウエ?オ(22)

sākhāviṭāpasampannaṃ mahārukkhaṃ nissāya vasati.

sākhāviṭāpasampanna はコンパウンドで「枝と幹を有する、枝のある幹を有する」というような意味の形容詞です。mahārukkha も mahā (大きな) と rukkha (木) のコンパウンドで「大きな木」という意味になります。そして両者とも語尾が目的語の -am になっていますが、なぜ目的語になっているのか。その鍵はすぐ後の nissāya にある、というところまでお話ししました。

いつものようにまず語尾から見ていくことにしましょう。āya に注目すれば、-ā で終わる女性名詞の属格や具格、処格などの可能性もありますが、そうすると何となくすぐ前の目的格との関係が分からなくなってきてしまいます。ふつうはここで頭を抱えてしまうことになるのですが……、「あ、ひょっとしたら、これはジェランドの語尾の -ya かもしれないぞ」と気が付くまでにはかなりの慣れが必要かもしれません。

nissāya が動詞のジェランドだとすれば、すぐ前の目的格はその動詞の目的格になっていると考えることができます。それでは、と、もとの動詞を探すために辞書を引いてみると、nissāya は nissayati (依る) のジェランドだということが分かります。ここから、「~に依る」と言うときは、nissayati という動詞は目的格をとるのだなと考えていけば、それはそれで全体の意味も通り、問題はないのですが……。辞書にも出ているように「~に依って」という意味の前置詞だと考えてもそれはそれで別に問題はありません。その場合は、nissāya という前置詞は目的格をとる、というふうを考えるわけです。ちなみに、パーリ語は前置詞によって前後にくる名詞の格が決まっていますので、注意が必要です。

nissāya には、「~の近くに」という意味があるので、ここまでの部分を意識すると、おおよそ次のようになります。

「昔、ベナレスで、デーヴァダッタ王が国を治めていたときは、菩薩は森の中で、鳥たちのリーダーとして、枝分かれした大木の近くに住んでいらっしやった。」

次の文に進みます。

Ath'ekadivasaṃ tassa rukkhassa sākhāsu aññamaññaṃ ghaṃsantīsu cuṇṇaṃ patati.

最初の Ath'ekadivasaṃ は、もともと atha と ekadivasaṃ だったのが、連声(れんじょう)と呼ばれる発音のルールに従って Ath'ekadivasaṃ になったものです。

atha は副詞で、英語の then と同じですから、この場合は意味の流れを考えれば「そして」ぐらいでいいと思います。

次の ekadivasaṃ はコンパウンドです。eka は「一つ」、divasaṃ は「日」という男性名詞の目的格です。両方合わせて「一つの日」となりますが、これは英語の one day と同じことで「ある日」という意味になります。

ところで、divasa が目的格になっているのはなぜでしょうか。その後に動詞があってその動詞の目的格になっているのでしょうか。この文の述語動詞は、語尾を見ていくとおそらく最後の patati だろうと見当がつかます。しかし、patati は「落ちる」という意味の自動詞ですから「~を」という目的語をとることはできません。仮に、「~を落とす」と他動詞で使うことがあったとしても、「一つの日を落とす」では全く意味を成しません。

結論を言ってしまうと、この目的格は名詞を副詞に変える働きをしているのです。目的格のこの用法は意外と盲点ですので、記憶の片隅に留めておくことと必ず役に立つことがあると思います。

以前にも引用したことがありますが、ekaṃ samayaṃ (この場合は、コンパウンドではなく、eka を独立した形容詞として用いていますから、eka もその後の名詞に合わせて目的格になっています)も「ある時」という意味の副詞として目的格が用いられている例です。

続く tassa rukkhassa sākhāsu の部分を見ていきましょう。最初の二つの単語はそれぞれ -assa という語尾で終わっていますから、男性名詞か中性名詞の単数属格です。sākhā は「枝」でしたから、ここまでは単純に「その木の枝」と訳していけばそのまま意味が通ります。

(続く)

前回の続きです。

Ath'ekadivasaṃ tassa rukkhassa sākhāsu aññamaññaṃ
ghaṃsantīsu cuṇṇaṃ patati

最初の部分は、「そして、ある日、その木の枝」となるというところまで前回お話ししました。さて問題はその後 *sākhāsu aññamaññaṃ ghaṃsantīsu cuṇṇaṃ* の部分です。sākhāsu は sākhā (枝) の複数処格ですから、「その木の枝で」となって、うまく後に続きそうな気がします。ところが、そうすると、その後の特に ghaṃsantīsu (これも複数処格) との関係がよく分からなくなってきてしまいます。

このように、近くに処格(ロカティヴ)が二つあって、前後の意味がよく分からないときは、「絶対処格」だと考えてまず間違いありません。

ここでもう一度「絶対処格(ロカティヴ・アプソリュート)」の復習をしておくことにしましょう

<絶対処格>

形 名詞の処格 動詞の現在分詞の処格

意味 「～が・・・するとき」

(英語の接続詞 then や thile があるように訳せばOK)

sākhāsu の次にある ghaṃsantīsu を改めてよく見ると、-ant の部分が現在分詞の語尾だということに気が付きますから、これはまさしく絶対処格の形以外のなにものでもないということが分かります。現在分詞 ghaṃsant のもとの動詞は ghaṃsati (こする) です。そうすると、ここまでは「そして、ある日、その木の枝がこすっている間に」となります。ここまですれば、sākhāsu と ghaṃsantīsu の間にある aññamaññaṃ は aṃ の語尾から、たぶん男性名詞の目的格で、すぐ後の ghaṃsati (こする) の目的語だろうと見当がつきます。aññamañña は「相互」というような意味ですから、「お互いをこする」つまり「こすりあう」「こすれあう」ということになります。なお、前回お話しした ekadivasaṃ (「ある日」という副詞) や ekaṃ samayaṃ (「あるとき」という副詞句) と同じように名詞を副詞に変える働きの目的格と考えて、aññamaññaṃ を「お互いに」という副詞ととってかまいません。

「そして、ある日、その木の枝がこすれあっている間に」

この文全体の述語動詞は最後の patati (落ちる) です。そうすると、ここまでに主語になる名詞がありませんでしたから、当然 patati の前の cuṇṇaṃ が主語になる名詞だということが分かります。主格が aṃ という語尾になっているということは、cuṇṇa (粉末) は中性名詞です。

「そして、ある日、その木の枝がこすれあって、粉が落ちてきた」

次に進みます。

Dhūmo uṭṭhāti

この文は、主語と述語動詞だけの一番単純な文です。dhūmo は dhūma (煙: 男性名詞) の単数主格、uṭṭhāti は「起きる」という意味の動詞です。「煙が起きた」つまり、煙が発生したわけです。これは山火事が自然発生する際の状況をお考えいただければよろしいかと思います。気温が高く、空気が乾燥していると、木の枝がこすれあって摩擦熱が生じ、こすれあったときにでる粉に引火して、山火事になることがあります。(つづく)

(文責: 小野道雄)

Taṃ disvā Bodhisatto cintesi.

この文も比較的分かりやすい文だと思います。taṃ は tad (それ) の目的格で、「それを」。disvā は -tvā の t がたまたまありませんが、ジェラント(～して)かなと見当がつきます。dassati (見る) のジェラントで、「見て」となります。Bodhisatto が主語で、最後の cintesi が cintati (思う) のいわゆるアオリストといわれる形になっています。アオリストというのは英語の過去形だと思っていたら結構です。英語とことなり過去形も主語によって語尾が変化しますからご注意下さい。全体の意味は次のようになります。

「それをご覧になって菩薩はお考えになった」

imā dve sākhā evaṃ ghaṃsamānā aggimṃ vissajjessanti.

ここからは菩薩(その時は鳥の集団のリーダーだったわけですが)がお考えになったことです。

この文も、あせらずに単語を一つ一つじっくりと見ていくことにしましょう。

最後の単語が、-nti で終わっていますから、主語が三人称複数ときの動詞の現在形の活用語尾だと見当がつきます。それでは、と辞書を引いてみても、vissajjeti という語はありますが vissajjessati という語は見あたりません。問題はあいだに挟まっている -ssa です。実はこれは「未来」を表す印なのです。形だけのことで言えば、基本的には、動詞の現在形の活用語尾の前に - issa があれば未来形になります。つまりこの場合、vissajjessanti というのは vissajjeti (放つ、出す) の三人称複数未来の形だということになります。

動詞が分かったら今度はそれに対応する主語を探すことにしましょう。主語は最初のほうにあるのがふつうですから sākhā (枝：女性名詞の複数主格) が主語だと考えてまず間違いありません。三人称複数ですから動詞の活用語尾ともちゃんと呼応しています。そうすると sākhā の前の imā dve とのつながりもうまくいきます。imā は imaṃ (これ、この) の三人称複数の女性形ですから、imā も dve (二つ、二つの) もすぐ後の sākhā を修飾していると考えれば OK です。「この二本の枝は、放つだろう」一体何を放つのだろうと当然思います。目的格の名詞がどこかにないだろうかと思すと、aggimṃ が目に飛び込みます。aggimṃ は、aggi (火) の目的格ですから、「この二本の枝は火を放つだろう」となり意味が通ります。

残りは evaṃ ghaṃsamānā の部分です。evaṃ は「そのように」という意味の副詞です。次の ghaṃsamānā はこの前の所で出てきた ghaṃsati (こする) という動詞のなんらかの形かなと考えられます。実は、-mānā というのはいわゆる現在分詞の語尾なのです(以前 -nta という現在分詞の語尾も出てきました)。-mānā と語尾が長くなっているのは主語の sākhā に合わせているからです。英語の現在分詞の用法を御存じのかたは、それをあてはめて理解していただければ結構です。この場合は、高校で習ういわゆる「付帯状況を表す分詞構文」と同じだと思っただけであればよろしいかと思えます。学校英語、受験英語でおなじみのあの「～しながら」です。ここまでの意味は次のようになります。

「この二本の枝は、あのようにこすれながら火を放つことだろう」

最初からここまでの訳は大体以下ようになりますので、物語のここまでの流れをもう一度思い出してみして下さい。

「昔、ベナレスで、デーヴァダッタ王が国を治めていたとき、菩薩は森の中で、鳥たちのリーダーとして、枝分かれした大木の近くに住んでいらした。ある日、その木の枝がこすれあって、木くずが落ちてきた。それをご覧になった菩薩はお思いになった。『あの二つの枝があのようにこすれて出火するだろう』」

(続く)

前回の続きです。

,so patitvā purāṇapaṇṇāni gaṇhissati,

最初の so は、「それで」で、この文の主語です。「それ」とはすぐ前に出てきた aggi(火)のことです。

次の patitvā は、-tvā の語尾から分かるように例のジェラント(ふつう「~して」と訳せば OK)の形です。patati は「落ちる」ですから、「落ちて」となります。

その次の purāṇapaṇṇāni は、いわゆるコンパウンド(複合語)です。かなり長い単語が出てきたら、先ずコンパウンドではないかと疑ってみてください。

purāṇa は、形容詞で「古い」、paṇṇa は中性名詞「葉」の複数形です。男性名詞や女性名詞にはこの -āni という語尾はありませんから、すぐ中性名詞だと分かります。

もし、コンパウンド(複合語)でなければ、形容詞は修飾する相手の名詞の性、数、格に合わせて語尾変化をしますから、この場合も、purāṇi paṇṇāni となります。

一方、コンパウンドは、最後の構成要素の単語以外は性、数、格の変化をさせる必要がありません。そこがコンパウンドの最大のメリットです。

結局、purāṇapaṇṇāni は purāṇi paṇṇāni(古い葉=落ち葉)と同じ意味になります。

最後の gaṇhissati は、-ssati という語尾から動詞の未来形だということが分かります。gaṇhati は、「捕らえる」ですから、さきほどの purāṇapaṇṇāni はこの gaṇhissati の目的語だと考えれば意味が通ります。直訳すれば、「それ(=火)が落ちて、落ち葉を捕らえるだろう」となります。つまり、枝と枝がこすれあって木の屑(くず)に火がつく、そしてその火が下に落ちて今度は落ち葉に火がつくということを言っているわけです。

次の文に進みましょう。

,tato paṭṭhāya imaṃ pi rukkhaṃ jhāpessati,

最初の tato は、ta(それ)の奪格で、「それより、それ故に、その後」というような意味になります。

次の paṭṭhāya の -ya という語尾もあのジェラント(「~して」と訳す)の語尾の一つです。

辞書で確かめてみると、paṭṭhahati(出発する)のジェラントで、「始めて、以来、以後」というような意味になると出ています。そして、例として、ito paṭṭhāya(これ以来)が挙げられています。これをあてはめれば、tato paṭṭhāya が「それ以来、その後」という意味になることが分かります。

次の imaṃ は「この」で、すぐ後の rukkhaṃ にかかっています。rukkhaṃ は rukkha(木...男性名詞)の単数・目的格です。pi は「~も」、英語の too に相当します。

最後の jhāpessati がこの文の動詞です。もう何回も出てきているように、-ssati は未来形の語尾です。jhāpeti は、「点火する」と言う意味ですから、imaṃ rukkhaṃ がこの動詞の目的語だと考えればいいわけです。

この文の主語は、やはり aggi(火)ですから、結局、ここまでの二つの文の意味は次のようになります。

「その火が落ちて、落ち葉に燃え移り、そしてやがてこの木にも燃え移るにちがいない」

(続く)

パーリ語アイウエ?オ(26) (2004.10)

今回は、鳥たちのリーダーだった菩薩が、そのうち木に火が燃え移るだろうから逃げるようにと鳥たちにおっしゃった、というところまででした。
今回はその次からです。

so sakunaṣaṅghassa imaṃ gāthaṃ āha :

so は鳥たちのリーダーだった Bodhisatto つまり菩薩のことです。

sakunaṣaṅghassa は、コンパウンドで「鳥の集団」、そのいわゆる与格(デイティヴ)の形になっています。与格は、「~に与える」の「与」という漢字を使っていることから分かるように、「~に」という訳をあてれば基本的に OK です。

imaṃ は「この」。次の gāthā は、いわゆる「偈」のことです。Thera = gāthā (テラ・ガーター)や Therī = gāthā (テーリー・ガーター)のあのガーターと同じです。最後の āha は「言った」という意味です。imaṃ gāthaṃ が āha の目的語になっています。

この文全体の意味はつぎのようになります。

「(…………鳥たちに逃げるようにとおっしゃって、)菩薩はこの偈をお唱えになった」

さて、次はいよいよその時菩薩が唱えられた偈です。偈は韻律を踏んだ詩の形式になっていますから、普通の散文に較べると格段に分かりにくいことを覚悟しておかなければなりません。日本語でも古文で出てきた和歌などの意味がなかなか分からなかったことを思い出してみればよろしいかと思えます。

Yaṃ nissitā jagatiruhaṃ vihaṅgamā
sv=āyaṃ aggaṃ pamuñcati,
disā bhajatha vakkaṅgā, jātaṃ saraṇato bhayan ti.

偈はとにかく難解なものが多いですから、よほど総合的な読解力に自信がないかぎり、訳があればまず訳に目を通してしまった方が効率的です。実際は、訳を見ても、なぜそのような訳になるのか文法的な構造がなかなか分からなかったりする場合もしばしばです。

まず最初の yaṃ ですが、これはいわゆる関係代名詞と呼ばれるものです。英語にも関係代名詞はありますが、パーリ語の関係代名詞の使い方は英語のそれよりもさらに分かりにくいところがあります。

ここで、まずパーリ語(サンスクリット語も同じです)の関係代名詞の用法について、具体例をとおして見ておくことにしましょう。

Yaṃ gāmaṃ mayaṃ gamissāma suve so dūro.

yaṃ が関係代名詞。gāmaṃ は男性名詞「村」の単数・目的格。mayaṃ は ahaṃ(私)の複数・主格で「私たちは」。suve は副詞で「明日」。gamissāma は gacchati(行く)の未来形。so は代名詞で「それは」。dūro は dūra(遠い)という形容詞の男性・単数・主格。この文の訳は「私たちが明日行く村は遠い」となります。

今回は、英語の関係代名詞とも比較しながらさらにパーリ語の関係代名詞について見ていきたいと思えます。

(続く)

パーリ語アイウエ?オ(27) (2004.11)

パーリ語の関係代名詞のお話の続きです。Yaṃ が関係代名詞です。

Yaṃ gāmaṃ mayāṃ gamissāma suve so dūro.
(私たちが明日行く村は遠い)

これを英語で言うと次のようになります。

The village which we are going to tomorrow is far away.

関係代名詞の位置の違いもありますが、それよりも一番大きな違いは、パーリ語の方はもう一度最後に so (それは) という代名詞がこなければならぬということです。

日本語訳を次のように分解して考えてみれば少しは分かりやすいかもしれません。

私たちは明日その村に行く、それ(その村)は遠い。

英語の関係代名詞に馴染んでいる人ほどパーリ語の関係代名詞がしっくりこないという傾向があるようです。できるだけ多く関係代名詞が出てくる文に接してパーリ語の関係代名詞の感覚に慣れる必要があります。

もう一つ例を挙げておくことにします。

Yaṃ purisaṃ tvāṃ addasa hiyyo so rājā.
(あなたが昨日見た人は王様です)

それでは、本文の偈に戻って、関係代名詞の使い方を再確認することにしましょう。まず、個々の単語から見ていくことにしましょう。

Yaṃ nissitā jagatiruhaṃ vihaṅgamā
sv-āyaṃ aggim pamuñcati.

出だしの yaṃ が関係代名詞です。nissita は nissayati (~ に身を置く) の過去分詞。jagatiruha は jagati (大地) と ruha (根を張った) のコンパウンド (複合語) で、「大地に根を張った」、つまり「木」 (= rukkha) のことです。次の vihaṅgama も viha (空) と gama (行く者) のコンパウンドで、「空をゆく者」、つまり「鳥」 (= sakuna) の意味になります。なお、viha の後に入り込んでいる ñ という鼻から抜ける音は、連声 (れんじょう) と呼ばれる発音の変化によるものですからあまり気にする必要はありません。

2行目の最初、sv-āyaṃ は慣れていない人にとっては、かなりてこずらされる部分です。ayaṃ はたぶん代名詞の ayaṃ だろうという見当はつくと思いますが、最初の sv- はこれは辞書を引いてもなかなか分からないのではないかと思います。

実は、sv-āyaṃ は so ayaṃ がやはり連声と呼ばれる発音の変化によって sv-āyaṃ になったものなのです。パーリ語にはこのように意表をつくような発音の変化もありますから要注意です。辞書を引いてもどうしても分からない部分が出てきたときは、この「連声」、発音の変化かなと疑ってみることが有効な方法の一つです。

aggim はもう何度も出てきているのでおわかりのように、aggi (火) の単数・目的格です。最後の pamuñcati は「発する」という意味の動詞の三人称・単数・現在の形です。

(続く)

前回の続きです。yaṃ が関係代名詞だということに注意して下さい。

Yaṃ nissitā jagatiruhaṃ vihaṅgamā
sv=āyaṃ aggim pamuñcati

まず、連音を元に戻して、さらに分かりやすく次のように並べかえてみることにしましょう。

Yaṃ jagatiruhaṃ vihaṅgamā nissitā
So ayaṃ aggim pamuñcati

Yaṃ という関係代名詞と so, ayaṃ という代名詞がちゃんとそろっています。ayaṃ の前にある so はこの場合はほとんど気にする必要はありません。あえて直訳すれば、「彼のこれは」となるのですが、ようするに jagatiruha (木) のことを指しています。

関係代名詞に注意しながら、直訳するととりあえず次のようになります。

「鳥たちが身を置いている(その)木、(彼のこの木)は、火を発する」

「鳥たちよ、お前たちが今いるこの木から火が出るぞ」と鳥たちのリーダーだった菩薩が鳥たちに警告を発したわけです。

次の行に移ります。

disā bhajatha vakkāṅgā, jātaṃ saraṇato bhayan ti

disā は「方角」。女性名詞なので、単数・主格かあるいは複数・目的格なのかをはっきりさせなければなりません。性・数・格の確定は本当に骨の折れる作業です。しかしそれをいい加減にやっているとんでもない意味の取り違いを犯してしまうことがあります。

この場合は、bhajatha が bhajati という動詞の2人称複数の命令形、vakkāṅgā は「鳥たちよ」という複数・呼格であると考え、disā は複数・目的格で bhajatha の目的格になっていると考えます。

「鳥たちよ、四方へ飛び去って(火難から)逃れよ」

意識すればこのようになるでしょう。

最後の部分を見ていきましょう。発音の変化を元に戻せば、次のようになります。

jātaṃ saraṇato bhayaṃ iti.

jāta が過去分詞だということに気が付けば、bhayaṃ が中性名詞の単数・主格だということにも気が付くかもしれません。jāta が jātaṃ となっているのは、主語の bhayaṃ に合わせているからです。saraṇato は saraṇaṃ gacchāmi のあの saraṇa の奪格です。そうすると全体は、bhaya が saraṇa から jāta する、というふうになります。

bhaya は「恐怖」ですが、ここではより具体的に「死」と訳してもかまわないと思います。saraṇa は「帰依所」。ここでは鳥たちがいる木のことを指しています。

「拠り所としているものがかえって原因となって死をもたらすことがある」

と (iti) 菩薩は鳥たちを戒められたわけです。

(続く)

(文責：小野道雄)